

講演会・資料でたどる北海道の歴史 講演録

「殖民地区画図と開拓

～長沼町、新十津川町を例として～」

講師：卜部 信臣 氏

はじめに

北方資料室では、所蔵する資料を題材に、北海道の歴史を学ぶ講演会を開催しています。

平成 20 年 9 月には、殖民地地区画図をテーマに取り上げ、北海道史研究協議会の協力により講師にト部信臣氏をお迎えしてご講演いただきました。今号は、その講演録です。

北海道の開拓期、農業開拓可能な土地を事前に測量し、区画割りをしたものが殖民地地区画図です。当館所蔵の殖民地地区画図と、それに関する記録をもとに、馬追原野（長沼町）や幌向原野（南幌町）の開拓の歴史、地名の成り立ち、初期入植者などについて資料やスライドも交えてお話しいただきました。

講演当日の説明や雰囲気そのまま再現することは難しいですが、この記録が資料や地域の歴史に対する理解を深め、また新たな興味をもつきっかけになることと思います。

講師のト部先生、北海道史研究協議会の皆様に改めてお礼申し上げます。

【講師プロフィール】

昭和 13 年栗山町生まれ。

昭和 36 年北海道学芸大学卒業後、栗山中学校を皮切りに空知管内の小・中学校に勤務され、途中滝川市教育委員会社会教育課在籍などを経て、平成 8 年度新十津川町吉野小学校長を最後に教員生活を終えられました。

教員の現役時代から、滝川市郷土史研究会、石狩川中流域文化研究会、空知地方史研究協議会、北海道史研究協議会などに参加され、数々の著作を発表されています。

現在、北海道史研究協議会常任幹事。

【著書】

- ・『石狩川中流域の生活文化史』（石狩川中流域文化研究会 1999 年刊、共著）
 - ・『郷土を訪ねて』（空知教育センター 2001 年刊、共著）
 - ・『空知の鉄道と開拓』（空知地方史研究協議会 2001 年刊、共著）
 - ・『空知を知る 空知地方史文献目録とその手引き』（著者 2004 年刊）
 - ・『目で見る中空知・北空知の 100 年（写真が語る激動のふるさと 1 世紀）』（郷土出版社 2004 年刊、監修）
 - ・『北海道の出版文化史 幕末から明治まで』（北海道出版企画センター 2008 年刊、共著）
- など

「資料で語る北海道の歴史」講演会

「**殖民地地区画図と開拓** ～長沼町、新十津川町を例として～」

講師：卜部 信臣氏

平成 20 年 9 月 20 日 於北海道立図書館研修室

はじめに

自分が知っているだけでも、行って習わなきゃならない人が何人もこの中においでになりますし、知らない人で、「おまえに言われなくても俺が教えてやるわ」っていう人が、きっとたくさんいると思います。まあ 2 時間ですから、皆さんの何か参考になることがちょこっとあればご満足いただきたいと、こう思っております。一緒に勉強をするというつもりで語らせていただきますので、ひとつよろしく願いいたします。

北海道は、アイヌの人達が以前に住んでいましたが、和人が住み始めて 100 年ちょっとで、北海道に約 500 万人住むようになったわけです。そのことは非常に大きなことだなあとという具合に最近思っているんです。それで今日は、殖民地地区画図の中に、どういう具合にして人々は生活を築いてきたかというようなことに視点を当てて、お話させていただきたいと思います。

石狩低地帯 — Si-Kot

アイヌ語地名解をやると、アイヌ語地名というのは 10 人いたら 11 通りぐらいの解釈が出て危ないんですが、思い切っていくと、支笏湖というのがありますよね。あれは、「Kot」は窪むということで、「Si」というのは本当に窪んでいると。で、支笏湖から流れているから、あの湖がいちばん Si Kot なんだなあと、自分は大部前からそう思っていました。そしたら、札幌市史の連絡誌の中に、藤村久和さんが書いていた中で、Si Kot というのは、石狩低地帯をいうので、あの低い所が Si Kot、本当の窪みで、支笏湖を言ったのではないのだと。この文章に出くわして、そうかも知れない、と思ったわけです。それで、そのことについて、最初に皆さんと考えてみたいと思います。

小道具を用意してきました。洗面器です。これにこう水を蓄えてるということになりますが、石狩低地帯、つまり、野幌とか長沼の低い所を、この洗面器の底で、洗面器の上のこちらを、広島とか、それから野幌、こっち側、栗山という具合に見れば、今日これからお話する所は、一番窪んだ所だということがお分かりいただけるかと思います。その窪みはどういうことかということ、この辺で一番窪んでいるということ。もうちょっと大きく見れば、大雪山に降った水は、ずうっと流れてこの辺に来て、夕張岳の向こうに降ったやつもずうっと流れてこの底に来る。小さく見れば、この付近の一番底ではあるけれども、大きく見れば、道央地帯、石狩国の大部分の一番底の部分です。そういう所に人々はどうやって生活を築いてきたかというようなことを、その始めの部分、殖民地地区画図を通して考えていきたいなと思います。

これを考えるのに、3 日ぐらい考えたんですよ。いろんな地図を細かに見たって、地図は何かいろんなことが書いてあるけれども、まあ平たく言えば、この辺は、漏斗を天に向けて待っているようなもので、雨がどさっと降ったらその水が一気にこういう低地に来る。大きい川が注ぐ所、アイ

又語で「ブト」と言います。夕張太、江別太、それから空知太。そこは、上流からの水をたくさんもってくるので、いつまでも水はけがよくない。そしていつも、じめじめしている。水がたくさんいつまでもあると、ものは腐りゆく。だからブトには泥炭地が多い。その泥炭地の所をどのように今の生活にしていったのかというようなことを、皆さんと考えていきたいというのが、今日の主たるところです。

北海道庁地理課発行の地形図

道立図書館にお願いして、地図を用意しました。いきなりこの古い地図ですが、まず発行所を、ちょっと下の方を見てください。字が今とは反対に書かれています、北海道庁地理課となっていますね。明治 24 年最初のもので。地図の方はそんなに詳しいわけじゃないですが、教えてもらったのでは、外国人が来て石版で地図を作りだして、開拓使の時に明治 8 年まで、日本で最高級の地図を作ります。それで明治 8 年に“Ishikari River”というのが出るのですが、開拓使でお金を使いすぎると予算を縮小されて、その地図の作業が凍結される。道庁時代になって、せつかくのあの基礎があるんだから発行しようということで始まって、出たのがこれと聞いております。地名がローマ字書きで、きれいにできあがっています。今から百何十年前、こういうものを北海道庁が出す力があったということは、すごいと思いますね。その意気込みってどうか。

それでちょっと確認したいと思うのですが、小樽とそれから札幌、その次は対雁、幌向、大体分かるかと思いますが、それからこっち側に来て、^{きよまつぶ}清真布って分かりますか？ 栗沢なんです。それが東のちょっと高台。そして山の中に栗沢って書いた所があります。ちょっと北、栗沢という所。栗沢という字の下、南に流れている川が夕張川なんです。そして長沼というものがあって、広島があります。その長沼の隣が今の南幌になります。長沼と南幌のことを、主にこれからお話していきたくて思っています。この図全体でいきますと、美唄の付近もずっと低地ですよ。美唄も泥炭地の深い所です。

空知支庁は樺戸、雨竜、空知、夕張の四郡

空知全体は、東の方に山脈があって、そしてずっと丘陵に来て、原野に来て石狩川に来る。東が高く西が低いというのが基本ですね。それで自分、空知〔出身〕なものですから、空知ってというのは四郡からなっています。南幌やなんかは空知郡。空知川の流域からずっと続く平野で、空知郡は深川というか音江の方からずっと南幌までが空知郡。そして夕張郡というのは栗山と長沼と由仁。あと夕張ですね。それで、石狩川の左岸が終わりました。右岸は樺戸郡と雨竜郡。樺戸郡は、月形と浦臼と新十津川。それから北は全部まとめて雨竜郡。空知郡が一番ずっとこう長いんですね。夕張郡は、比較的狭いんです。今日お話しする馬追原野っていうのは夕張郡ですから、これは割と問題がない、そういう区域。ところが幌向原野は、栗沢や何かが含まれますから、山側に入ってきたら、元夕張郡の所の資料は空知郡にあります。だから資料を探すときよっぽど気をつけないと、「あ、夕張郡には無いな」と思っていると、山沿いの資料がごっそりとある、ということが見受けられます。

最初にお話しするところは、この明治の 24 年、何にも人の住んでいない所でした、ということです。150 年程前に、松浦武四郎がここを旅した時は、石狩番屋を出て対雁で一泊した。それから舟で千歳川を上って、そして今でいう長沼の幌内で一泊をして、それから陸に上がって、次のルートがなかなか分からないんですが、栗山の円山の付近でひとつのベースキャンプをして、あっち行

ったりこっち行ったりして、支笏湖に帰って来る。150年前は人が歩けなくて、丸木舟で行ったり来たりしたところですよ。

殖民地区画図は、間接保護政策の大切な柱

それでは、お手元の資料のレジュメに沿ってお話をさせていただきます。1番の、殖民地区画図の背景ですが、開拓使時代は、北海道に行く人手を挙げろ、手を挙げた人にそのお金を渡して、資料を渡して、それで行ってらっしゃい、というやり方をしていたわけです。それを、直接行く人に援助をするので、直接保護政策といっています。ところが行く人にとっては、その土地は農業に適するのかわ、天候はどうなのかわ、近くの町に行くにはどうなのかわ、飲み水はあるのかわ、そういうことを全部自分で調べなければならなかった。それと、北海道に行って理想郷を作るとかかっていう、そういう高邁な理想を持った人は少なく、いやあお金をくれるなら北でも行ってみるかっていう人で、大体失敗しています。移民政策から見ると、かたまて町ができたということではなくて、移民の数からいうと、うまくいってなかった。そのことを反省して、道庁時代になったら、社会条件の整備をすれば人は行くにちがいない、そういう具合でしょう。それでこの殖民地区画図というのを作りますが、これの基になるのが、一番最初、北海道の土地は誰の土地かということです。明治5年の規則で、いま、所有権の無いものは、すべて官有地とするというきまりがあったんです。これが後に、現在でもアイヌの先住権とか何とかに絡んでいくと思っているのですが、明治5年の時に、所有権の無いものは、すべて官有地とする。

北海道殖民地撰定報文

それを引き継いで、道庁では明治19年、土地私下規則というものをつくって、全部官有、所有権の無い政府の土地だよ、とします。するとそこに、測量隊が測量に入ります。そして農業のできそうな土地を調べます。その植物はどうか、水はどうか、近くの町にはどうやって行くのかわ、というのを調べたのが殖民地撰定事業といっています。この時偉かったのは、2年位で根室の方まで、大体可能性のある大きな殖民地を撰定してることですね。どこかの町村で、殖民地の「殖」が木偏の「植」になってましたが、これだとまた意味が全然違ってくると思うんですね。この、「歹」書いた、こっちの殖民。「殖」っていうのは増やすっていうことですから、民を増やす。人の住んでいない所に民を増やすっていうことだから、そこから搾取するって意味は無いですね。それで2年位で大きな区画を終えまして、その後だんだん細かくなります。

今日、受付名簿を見たら、遠藤さんという方が参加されているようですね。この殖民地区画図のデータベースを作った方で、いやあ、僕はこんなところでしゃべるのはちょっと場違いだなあと、恐れおののいて話をしてるんですが、道立文書館で全部の殖民地区画図を整理してですね、こういう呼び名はこういうのだったっていうのを教えてもらえます。

それで、その撰定事業をやった人はですね、内田^{きよし}瀨だとか、それから柳本なんですけど……。ここにちょっと持ってきましたが、神^{かん}埜^{のつとめ}努^{つとめ}っていう北海道新聞社の学芸部長をやっていた人が、『柳本通義の生涯』というのを書いています。自分にとってはこれは非常に面白い本で、札幌農学校へ来るまで、どのようにして来たかと。英語を勉強したい。三重県から東京まで行くのに、どうやって行くか。行く方法が分からない。日蓮宗で太鼓を叩きながら、ずっと東京まで行く行列がある。その中に入って歩いて東京まで行く。東京で、英語塾で勉強して、札幌農学校の試験を受けますが、

最初の試験に落ちて、秋に入ってから開拓使の役人になって、そのあとずっと仕事をしていく、ということが書かれているのですが、当時の資料を細かく使ってそこまで書いたものは、少ないんじゃないかなと思っております。

農業の適地がこれだけの広さでこうありますよ、ということ調べたのが殖民地撰定で、その結果を報告したのが『北海道殖民地撰定報文』といいます。自分達が学生の際は、なかなか見ることができなかったのですが、復刻されまして、誰でも見られるようになりました。

北海道殖民状況報文

殖民地撰定事業から10年たって、その土地はどうなったかということ調べた報告書が出ています。それが『北海道殖民状況報文』。殖民まで同じなのですが、状況報文。これは、道庁の河野常吉らが中心になったもので、すごく貴重な資料だと思っております。最初に農業適地の撰定事業、その他の仕事をした、道庁の河野常吉の手書きのこれが殖民地地区画図です。これと同じものがどこかに…。幌向原野の最初の入植者を記入した地図はあったのですが、馬追原野のものが無かったんですね。それで、馬追のものがどこかにないだろうかと探していたら、やっぱり世の中どこかに転がり落ちているもので、考古学をやっている野村崇さんという人が、古本屋で買ったんだと。この2つの地図は、すごくよく似ているのです。だから、その時の資料でないかなと思ってらるんですが。

ちょっと前後しましたが、広い所を、農業適地はこういうのがありますよっていうことをやって、その次にですね、それを細かく切って、ここはあなたの所、これは…という作業が区画図なわけです。昔、北海道の土地について書いた本に、北海道は羊糞を切ったような土地の割り方をして、竹箒を逆さまに立てたような木が生えているとありましたが、要するにポプラの木があって、区画が直截だ、そういうことなんですね。まあ、自分達北海道で生まれ育った者には何でもない事ですが、初めて見る人にとっては、凄い驚きですね。

自分、十津川に母村訪問で行ったときに、向こうのいろんな事を教えてもらって、その返礼で向こうの子供達が来るんです。千歳まで迎えに行きましてね。いやあ、北海道のことを教えなきゃいけないと思って、たくさん調べて語ろうと思ったんです。バスに乗ってちょっと動き出したら、「わあ！ 道まっすぐだあ！」って言って、持っているカメラで、道のまっすぐなの、みんな写してる。十津川の奥は、道がみんな曲がっているから、こっちの説明なんか聞くものでない。もう30分以上そうやってる。「やあ、こっちもまっすぐだ、こっちもまっすぐだ」って言って、まっすぐな道がそんなに珍しいのかなと思うぐらい、新鮮だったようですね。

それでですね、区画図にはなかなか入らないんですが、1ページの7番目のところを、ちょっと見て頂けますか。問題点として、明治25年の5月10日。第3回日本帝国議会で、河野広中等が質問しました。北海道の土地処分は、大土地やお金持ちに有利なようにやって、一般の出願者にとっては極めてまずい、という質問をしたんですね。この頃は、薩長土肥、藩閥政治の弊害が出てきて、明治維新で功労のあった藩たちが勝手なことをやっているじゃないかと言っても、証拠が出てこない。そこで、北海道の土地処分が、この一つの証拠として帝国議会で質問が出た。これは、非常に大きなことだと思うんですね。

図書館司書の力は大きい

平成2年だと思いましたね。自分が今金にちょっと勤務したことがあって、こっちへ来る用事があってですね、時間やりくりして、この道立図書館へ来たんですよ。そして、資料を探してもうまく探せないし、二階の一般閲覧室のカウンターのところをうろうろしてたら、司書の方がね、「どうしましたか」って言うから、「いやあ、明治のこういうのを探しているんだけど、議会の何か資料ありませんかね」って言ったら、「ああ、ちょっとお待ちください」と、5、6冊本を持って来たんです。で、その中に、帝国議会の議事録があったんです。広辞苑くらいの厚い本。第3回というのは知っていましたから、それ見たらね、その質問事項がそっくり載ってたんです。いやあもう感激でしたね。日本の国は大したもんだと思いました。明治の100年前の記録が、この北海道の図書館にちゃんとあるってことが、すごいと思いましたね。それと、図書館っていうのは、図書館司書っていうのは、やっぱり本の専門家だなって思いました。自分達は、何かまあ、40年近くいじくっているから、自分の方が資料は知っているつもりなんだけど、でも本に関してはですね、多くずっとやっている図書館司書の人の方が専門家だと、心を入替えないものは調べられないなという気がしました。つい今年の2月の時もそうでした。さっき司会してくれた宮本浩さんという方が、「いやあ、こういう本が欲しいんだけど」って言ったら、遠慮がちにふっと出してきてくれたのが、もう、自分が見たかった、その北海道の出版のことがきちっと書かれたものですね。そういう本は、自分の方が知っていると思いがちなんだけど、本に関しては、図書館は図書館司書だし、博物館に行ったら学芸員に聞くのがいちばん近道だなあと、こう思っております。

平凡社から『北海道の地名』という、こんな厚い本が出ています。自分も少し書くはめになって、大多数は向こうの人が書くんです。でも東京の人は、どうやって北海道のことを書くのだろうなというのが、自分の興味の的でしたね。そしたら、下手くそなインターネットがつながりましてね。向こうの専門にやっている人が、何か分からないことがあると、メールでこれはどういうことかって聞いてくる。ずっと見ていて、はあはあ、あれが種本か、って分かったのが、『北海道殖民状況報文』。全部網羅しているから、これを徹底的に読んで、そして明治のこの時代のやつを頭に入れて、それで作業をしていることが、分かりましたね。まあ、ひとつ言えば、自分もこういうこと、やり始めはわかんなかったんです。幌向太と幌内太。「先生、これどっちが・・・同じじゃないの」って。幌向太といたら、あそこのね、曲がった所の幌向。幌向川が石狩川に出る所です。その時質問で来た幌内太というのは、幾春別川の幌内炭鉱から、幾春別川に出る所ね。まあ、幌内っていうのは道内たくさんありますから、そこが幌内。字だけを見て頂くと分からないわけですよ。そういうのが分かって。

北海道、羊糞を切ったように云々というのは、この殖民区画があって、この明治25年の質問を受けて、その時の回答が、これからは土地処分の手続きについては厳正に対処しますっていう答弁をするんですね。それから、ここから先はもう自分の感じなのですが、例えば雨竜の蜂須賀農場。あそこは、音江法華の上に登ってね。あの辺俺にくれて言って、広大な、ステッキでこうやった所を全部払い下げたので、そういうことが批判されたものだから、開墾されていない所が、みんな返却しています。27年頃に返却命令が出てきて、その後に屯田が置かれたり、本願寺派のものが置かれたりしました。殖民は、長沼と幌向、先に入った人もいますが、殖民区画は明治25年ですね。明治25年に碁盤の目のように区画をして、その時点で、先に入った人も、一回移住しています。

場所を変えてるんです。どうも区画後であると、自分は思っています。

馬追原野の地形

ちょっと具体的に、馬追原野。主に馬追原野は長沼と捉えていいですね。隣が南幌ですか。長沼の所と、今では南長沼と言っていますが、千歳の方の、そこが区画になっております。さっきも申しましたが、東というか北の方に馬追山があって、西の方に夕張川があるものですから。夕張川は南に向かって流れています。ですから極端に言えば、土地からいうと、東高西低に傾斜しているんですね。川を見れば分かりますが、もうちょっとこうなるかな。どっちから人が入るかといったら、湿地でない所から、こう入って来るわけです。北の方とか、馬追山の裾野の南長沼です。そういう所から最初に入って来ます。考古学の野村崇先生は、中学時代から、その辺の遺跡をずっと調べて分布図に落としています。

お手元に『ながぬま史蹟百撰』（長沼町教育委員会社会教育課文化振興係）っていう赤いパンフレットがいていたかと思います。そうそう、これを言ってくれと言われてたんです。現在はね、新しいパンフレットを作ったので、こっちのパンフレットはもういらなくなったっていうんです。おお、それなら今日に使えるからくださいって言って、もらってきたんです。でも渡す時、くれぐれも言ってくださいよ、そんな古くさいの使ってるって言ったら怒られるから、今はこれですよっていうのを、確かに言ってくださいよ、って担当者に言われたんです。でも自分としてはね、こっちの方が隣の幌向原野も見えるし、いいなあと思っております。赤いポチポチが埋蔵文化の土器や石器の出るところです。大体、馬追山の裾野にありません？ それも、原野との接点。もうちょっと大きな図で見ると、たくさんにこう川があるんです。そこに必ず大きな遺跡が出てくる。だから 150 年前、松浦武四郎が、将来どこに道をつけたらいいか調べよという命令を受けて、千歳川を上ったのですが、松浦武四郎は、アイヌにどこに道をつけていいかを聞いた。ではアイヌの人達は、誰に聞いたのか。日高の鹿は、冬は向こうは雪が降らないから、笹やなんか食べられる。ところが、日高は夏はガスがかかって、植物が十分に繁茂しない。こっちへ来ると繁茂するから、鹿が行ったり来たりする。その鹿のルートが遺跡の分布と非常に似ている。

それからもうひとつ。この図のところでは、馬追の裾野に、小さい溜め池がたくさんありますが、これ、ずうっと深川の方まで、空知全部同じです。少し高い所は、タコツボとか言っている、池みたいな所に雨水をためて、そこから水を引いて、水田を作るということですね。忘れないうちにここで言ってしまうでしょう。赤平の住吉という所に、空知川を堰き止めて、北海灌漑溝というのがあります。小さな小川みたいなもの。小さい川をずっと山裾走らせて、そこから水を引いて水田の水に使うという、東洋一と言われていた北海灌漑溝は、赤平から南幌までですね。最初はもっと広がったんです。音江の所にある空知頭首工。空知土地改良区の頭首工があるんですが、そこからずっと南幌まで続けようという、最初の道庁の計画だったのです。そしたら、美唄とか南幌の泥炭地の人達と一緒にやると、この会社潰れるかもしれないって、みんな賛成しないわけです。それで北の方の、音江、江部乙、滝川の北半分は、俺達で先に組合作って水田始めようとやったのが、今の空知土地改良区ですね。それが約 40 km。赤平の住吉から南幌まで 80 km です。いちばん基になる太い幹線っていうのはね。最初の 120 km の計画が 2 つに分かれたとはいいいながら、湿地帯を水田にする、空知では一番大きな事業で、今を支えているんだなど、こう思っております。

馬追原野・幌向原野周辺に最初に入植した人たち

話があっちこっちに行っちゃいましたが…。最初の入植者というのが、2枚目のところですが、二三ちょっと自分の知っている範囲でお話したいと思います。最初に長沼に入ったのは、吉川鉄之助。岩手県の人です。空知の開拓は大体20年代ですから、札幌周辺に入った人が、もう一回再入植する例が非常に多いのです。吉川鉄之助は開拓使なんかにも勤めていて、平岸でりんご園をやっている、北長沼、今の長栗橋って、栗沢の方から長沼に来る東2線の橋がありますが、その辺に入ったわけです。

それから、由仁に最初に入った古川浩平という人がおります。21年は室蘭郡の郡長で、その次の年は札幌の区の区長をやっている。由仁に住まいを持っていて、長沼に事業を展開していく。古川浩平は室蘭郡長ですから、栗山の最初に入った泉麟太郎やなにかを、よく知っているわけです。それで、あそこはもう土地も狭いし、将来大変だから、栗山の、今で言う角田ですね、阿野呂の川の麓、阿野呂太にいい土地があるから、そこに移ってはどうかと。進言したのはこの古川浩平ともうひとり、石川光親という人がいます。仙台藩の、ずっと南の方で、今は角田市という所があります。そこのお城は石川家が持っていた。その石川さんの子孫の人が、慶應義塾へ行って勉強して、道庁に入って役人をしている。自分達の親戚の者が苦勞していたから、古川浩平と相談をして、その角田に入ったと。それで、その角田に入って間もなく、長沼で真成社というのを起こしていくわけです。

それから亀谷宇之助っていうのは、北長沼に土地を求めているのですが、これはね、そこに置いてある『馬追原野』の資料編で、すごく面白い記事があるんです。辻村直四郎は、土地が欲しくて出願している。なかなか土地が手に入らない。毎日のように道庁に行って、そしたらそこで、亀谷宇之助に、「あんた、そうやって毎日来ても土地は無いよ。だからひとまず自分は北長沼に土地を持っているから、そこで仕事をやったらどう？」と言われて、北長沼に入る。そして仕事をしている時に、次の年ですね。いやあ、道庁退職で何か、幌向原野（今の志文にある辻村屋敷）に、土地を手放す人がいるらしい。500円だそうだ。500円の金が無い。で、100円まけさせて400円かき集めて、その土地で権利を持って入ったのが、現在の辻村直四郎の入った所と書かれています。その『馬追原野』を書く元になった直四郎がここ北海道へ来てから、北長沼の亀谷農場で働いて、そして土地を見つけていて、買って入るといのは、この時代の開拓のひとつの断面を表しているのではないかと自分は思っております。

次、福井晴治っていう人が、苫小牧のちょっと南、勇払ですね。その測量士なんです。ですから、こういう情報が早かった。測量士っていうのは、開拓の始めではかなり重宝されたんですね。この人が土地を求めてここに入って、栗山の市街地の区画をしたという具合に書かれています。

「真成社」の方式を北空知に生かした沼田喜三郎

あと、沼田喜三郎。北空知に沼田という所がありますよね。あそこを拓いた人なんです。なぜか、もとは長沼に入って、仕事をしていたってことは、1行も書いていない。これは、道立文書館にある土地台帳にもちゃんと載っておりますし、今でいうと、長沼の市街地の真ん中に土地を持っていました。自分がいちばん興味を持っているのは、北竜の方へ行って、拓く時の仕方です。お金のある人はお金を出して、無い人は働いて、そして土地を拓いていく。労働株と資本株に分けているん

ですね。泉麟太郎なんかも夕張開墾起業の場合は、毎月3円、3年間出す。そうすると、10町歩の土地をあげます。それから、お金の無い人が開墾を一所懸命する。そのかわり味噌、醤油、石油、そういうものは資本株で用具を買って与えていく。それで、3年たったら5町歩の土地をあげます。開墾の方式で、お金のある人はお金を出して、労働力のある人は労働力で開墾を進め、それを、資本株と労働株に分けた。これをそっくり北竜へ持って行ってやるのです。家族組合農場が解散して、蜂須賀だとかあの辺、株主の人が土地をもらっていて、東本願寺の大谷さんだかが、土地をもらってないっていうのを聞きつけて、土地の払い下げを促して、自分がその事業を推進する係になって、事業展開するんですね。そのやり方が間違いなく、長沼のここで学んでいったものだと、自分は思っています。

ついでながら、雨竜の北に、ひとつの村ができたなら北竜っていいですね。北竜のまた北に村ができたならここは何ていうか、というのが今の話です。上北竜っていうんです。上北竜が名前を変えて、沼田になったのです。この辺はなんか地名では、べちゃべちな所なんですね。例えば、今、北竜というのがありますよね。北竜の町にある郵便局は、何ていう郵便局でしょうか。なんてクイズです。和やわらなんですよ。どうして北竜でないんですか。北竜にある小学校は、何ていう小学校でしょうか。北竜じゃないんです。真竜なんです。どうしてかというと、北竜は、沼田北竜といって、沼田町の中に北竜地区があるんです。そこに、本願寺駅通があり、開拓の拠点でした。それからしばらくたって、役場をどこに建て替えるかで、綱引きをやるわけです。南と中と北と。それで、今の和に行った時に、「そしたら北竜村に入らない。沼田に入る。」って言ったことから、こんがらがって、沼田の中に本家の北竜が残ってしまったわけです。沼田の本家の所に郵便局もあったし小学校もあって、北竜小学校といったから、新しく北竜になった所には、北竜小学校って名前が付けられない。郵便局も。だから、和と、こうなった。その頃、中学校はなかったから、北竜中学校は、北竜中学校。こういうことなんですね。そんなこと見えて、鬼の首でもとったように楽しんでいるんですが。

まあ、あの辺がひとつの境目ですね。沼田の町史はですから、沼田喜三郎さんを中心にして「わしゃ、嫌いだよ」というところから始まるから、本願寺についてはね、非常に薄くしか書いてない。沼田が拓いたんだ。そしてその会社は共成っていう、共に成るです。地名としても共成というのがあります。

そういうことで、最終決定として南端の和になったので、北端の本願寺地区は、狭間にある地域というのは、歴史に浮かんで来ないんですね。

駅名 栗山、栗丘、栗沢の誕生

話あっち行ったりこっち行ったりしますけれど、自分、栗山の桜丘生まれなんです。明治38年まで、栗沢村だったんです。だから、栗沢町史にも書かれないし、栗山町史にも書かれない。書いてもなんか1行くらい。それで、角田の所へ行きましたら、角田の隣は南角田という所なんですけど、泉麟太郎やなんかが入植したと同じくらいに、林梅五郎っていうのが、手稲から入ってきました。でも、川1本向こうへ行ったら、開拓の始めは夕張なんです。だから、そこの始まりについては、夕張にも書かれてないし、栗山にも書かれてても少ししか書かれてない。だから、狭間っていうのは注意する必要があるなあっていう気がしております。

あっちゃこっちゃと話が行きましたが、ああ、これだけ言って終わらないと大変だ。栗山のトン

ネルの所に、自動車学校があります。その奥にちょっと高いところがあって、そこに渡辺大助という人が入植したんです。これがこの付近で一番古いと思います。明治 20 年。北辰一刀流、真影流で、三笠の集治監ができる時に、腕が立って人格がしっかりしていて、頼むから一緒に行ってくれと、渡辺維精が連れてきた男なんです。空知集治監で脱走があって、それを追っかけて馬追山を見たのが明治 17 年で、今でいう自動車学校のトンネルの付近はいい所だなあっていうので、19 年に、内藤国三郎っていうのに、おまえ、ちょっとそこ拓いてってくれって言って、20 年に自分が退職して、そこを拓き始めるんです。どうしてそこかという、川を 1 本渡れば、馬追山の裾野に出るんです。馬追山の裾野をずうっと行ったら、千歳に抜けてしまう。市来知でもし脱走があったと言えば、そこを押さえれば、あとは芦がたくさん生えている湿地だから、他にいきようがない。栗山のトンネルのところは交通の要地で、喉仏になる。それがひとつ。

それから、杉武一郎さんっていう人がおります。岡山県の人ですが、この人もやっぱり集治監で働いてお金をためて、どこがいいだろうっていったら、吉川鉄之助に、ここがいいよって、栗山の駅裏を言われた。でそこに入るわけです。それが 23 年ですね。

室蘭線の工事は 23 年から始まって、トンネルの手前の自動車学校の辺りに市街地ができて、誰しものがあそこに駅ができると思ったんです。ふたを開けてみたら、駅がない。空知で駅があったのは、苫小牧の次は由仁、由仁の次は岩見沢。それで駅が無かったものだから、こりゃ大変なことになったっていうんで、当時は北炭の経営ですから、猛運動をやって、26 年に栗山駅が開かれる。そして、それを聞いた栗沢の人たちは、「俺たちも駅を作る」って言って運動するわけです。そこ栗沢は 3 つ大きな団体があって、必成社と小西と砺波。自分の農場内に駅があるってことは、地価が高くなるから、俺の所にとって引っ張りあいをするわけです。そして最終的には必成社の地域に駅ができることになった。駅の名前は栗沢でなくて、俺たちの農場の中を流れる川、清真布にするっていうんで清真布駅。そしたら、栗山の駅は、駅名はどうしたっていうことになると、泉麟太郎が角田村だから角田駅にしてくれと陳情するわけです。南幌と長沼は背中合わせなんです。町村ごとに見ていたら分からないけれども、野呂栄太郎のお父さんは、野呂市太郎さんといって、南幌の三重団体に入った。そして測量ができるもんだから、泉麟太郎に見込まれて、泉麟太郎が経営する真成社で仕事をする子供達に言ったんですよね。10 里の道も 9 里半をもって半ばとする。これで半部終わったって安心するなよって言ったんですが、まあ、自分もそんなような気分でやらせてもらいます。

2 ページ目の、「真成社（泉麟太郎） 石川邦光を支える」というところにいきます。24 年になって角田村を町名に変えるときにですね、いやあもう一緒にしようよと、栗山町にするわけです。で同じく 24 年、清真布駅を町と一緒に栗沢駅にしようっていうんで栗沢駅になりました。そしてあの辺、栗沢、栗丘、栗山、どこがどこだとかいうような駅名が並ぶという感じになりますね。なんかちょっと学問らしい話もしないで・・・。

それから、酒喜久左衛門っていうのも、石川県から上がってきて、白石の煉瓦工場で働いて、そこで小金をためて、そして栗山のトンネルの所で宿屋さんをやって、そのお金を増やして長沼に入ってくる。長沼に入ったのが 26 年です。

有松準太郎っていう栗山小学校の校長先生がおりますが、大正 5 年です。この先生はすごく偉いと思いますね。今自分が言ったようなことは、『栗山発達記念誌』にきっちりまとめて書いてある。こういうことを書いて残してくれたおかげで、今自分はこんな話ができるんですね。

幌向村駅通所跡

時間があまり無くなって来ましたので、写真を見ながらまとめに入ります。これは、幌向村駅通所の写真です。平成 18 年国の登録有形文化財に指定されました。水害の常襲地帯ですから、土台を高くして、さらに内部の床も 2 段、3 段と高くしているところに特徴があります。南流してきた石狩川が西流に大きく流れを変える所が幌向です。川には、浅くて小石などがあって、さらさらと流れるところと、深いよどみになっている所があります。アイヌの人たちは、浅いところは、鮭が尾鰭で穴を掘り、卵を産むところとなるのでイッチャンとかイジャンと言い、深いところはモイ、とかムイと言います。ここは、魚がたくさんいることが多いのです。アイヌ語では O と U の中間の発音が多いので、それを聞き取る和人がモイと聞いたり、ムイと聞いたりしたのです。アイヌで大きいはポロで、小さいはポンです。石狩川が大きく流れを変える所はポロモイとかポロムイと言っていました。これに幌向の漢字を当てて幌向という現在の地名ができました。幌向村の設置は明治 16 年で、空知では月形村、市来知村（三笠）について古いのです。

翌年に、岩見沢村が設置されます。しかし、現在の南幌町は明治 28 年の幌向村戸長役場の設置をもって村の始まりとしています。岩見沢村以前に幌向村があったことは、南幌町にとっても大切なことと私は思います。幌向村が町制を施行する時に、「幌向町」としたいと岩見沢市に御願している文書が、昭和 38 年の『岩見沢市史』にあります。岩見沢市では、「幌向町」はすでに岩見沢の地名にあるのでお断りしますとの回答をするのです。ですから、幌向村では昭和 37 年に、夕張鉄道の駅名から「南幌町」とします。しかし、言いにくいとして、昭和 43 年に現在の「南幌町」に改称するのです。この幌向原野の殖民地撰定は、明治 19 年、区画測量は明治 26 年です。長沼のある馬追原野と、南幌町のある幌向原野は、夕張川を挟んで平坦なところですが、殖民地区画の基点が違うので東西南北の向きが違います。国道 12 号線より月形の方が幌向原野では北になり、南幌町のあるところは国道 12 号線より見て南 1, 2, となっていくます。東西は旧幌向川で分かります。

保原元二の像（第 6 代石狩治水事務所所長）

札幌の学校に、アメリカのホイラーという土木教授がいました。その教えを受けた^{ひろいさみ}広井勇は、その後アメリカで研究を積んで母校の札幌農学校教授となり、明治 32 年に東京帝国大学の教授となります。その教え子が保原元二です。夕張太に流れていた夕張川を切り替えて、石狩川に直接流れるようにした工事を指揮しました。大正 11 年に着工して、昭和 11 年、11 km の新しい水路の誕生によって、長沼、南幌の水田、畑は倍増したのです。低地帯開発の恩人として、清幌橋の南幌側の堤防にこの像は建立されました。

新十津川村吉野小学校とその地域の児童数変遷図

これは、新十津川の吉野地域の児童数の変遷を示したものです。昭和 36 年ころをピークにして、急激に減少していることが分かるかと思えます。これは、新十津川だけでなく、空知の農村の一般的傾向です。新十津川は、殖民地区画の最初に実施したところですが、明治 23 年、石狩川の右岸の肥沃な土地が最初の区画地でした。ついで明治 33 年に、学園地区を中心に丘陵地帯の殖民地区画がされます。明治 37 年に山地の殖民地区画がされて、入植が進められました。石狩川から雑壇をのぼ

るように一段、二段、三段となっています。一段のぼるごとに積雪が一メートル増えるといわれています。離農は、三段目からはじまりました。10年前は、2段目の離農は、少なかったのですが、最近の後継者不足から2段目の離農者が目につきます。

殖民地画は、最初は大地積の農業条件のよいところから、明治30年代後半は山間の小地積の農業条件の厳しいところに向かいます。道路が舗装になって交通条件がよくなると、離農者が多くなる傾向が見られます。

国が健全であるには、国のすみずみまで働く人がいて、教育・文化、健康・安全を等しく享受できることが肝要です。

昭和20年敗戦を体験したとき、地域中心の文化、地域中心の生活をめざしました。競争社会でなく、連帯社会を目指しました。

明治の殖民地地区画図が100年後の現在、どのようになっているかを見る、状況報文を考えてみたいと思っています。

長い間、ご静聴、ありがとうございました。

《 参考文献 》

- 1 「札幌で話されていたアイヌ語の行方」 藤村久和著 『札幌の歴史 「新札幌市史」 機関紙』 第4号 札幌市教育委員会文化資料室 1983.2
- 2 「本庁の殖民地撰定及区画測設事業」 『殖民公報』 61号 北海道庁拓殖部 1911.7
- 3 『殖民地選定要項』 北海道庁拓地課 [出版年不明]
- 4 『北海道国有未開地処分法完結文書』 全7巻 北海道立文書館 1988～1993 (北海道立文書館所蔵資料目録 3～9)
- 5 「殖民地地区画図のデータベース化について」 遠藤龍彦著 『研究紀要』 第7号 北海道立文書館 1992.3
- 6 「殖民地地区画図所在目録」 『研究紀要』 第7号 北海道立文書館 1992.3
- 7 『北海道市町村沿革台帳 自明治2年 至大正4年』 北海道総務部地方課編 北海道総務部地方課 [1929]
- 8 「第三回帝国議会衆議院」 『大日本帝国議会誌 第1巻 自第1議会 至第3議会』 大日本帝国議会誌刊行会編・刊 1926

殖民地地区画図と開拓

平成 20 年 9 月 20 日 (土) 13 時 30 分より

北海道立図書館研修室

江別市野幌

ト部信臣

I 殖民地地区画図による土地処分の基本

1 殖民地地区画図の背景

開拓使時代の直接保護政策による開拓事業の反省

2 殖民地撰定事業 「北海道殖民地撰定報文」北海道出版企画センター

北海道殖民地撰定報文 明治 19 年～同 23 年調査 北海道庁殖民課明治 24 年 1 月刊

19 年 8 月～12 月 内田瀨、十河定道 空知郡、夕張郡、千歳郡、勇払郡

20 年 柳本通義、福原鉄之輔

北海道殖民地撰定第二報文 明治 24 年～同 28 年調査北海道道庁殖民課明治 29 年 12 刊

北海道殖民地撰定第三報文 北海道庁殖民部拓殖課明治 30 年 6 月刊

地理、面積、土性、植物、排水、用水、運輸の項目、

「柳本通義の生涯」神埜 努 平成七年

3. 殖民地地区画図

殖民地地区画図は、直角法によって方 900 間の大区画を作り、これを 9 等分して 300 間の中区画とし、さらにこの中に間口 100 間、奥行き 150 間の 1 万 5000 坪を区画して 6 戸を入れるという方法である。

明治 23 年の新十津川町 「トック原野」区画割測量が最初である。

4 殖民地地区画図を見て貸し付けを受けて、入植する。

殖民地区画図を見て入植計画を添えて、希望地を申し込む貸付を受ける。

許可になると入植して開墾にとりかかる

5 10 年後に「成功検査」を受けて土地の払い下げを受ける。

6 殖民地状況調査 「北海道殖民地状況報文」北海道出版企画センター

「北海道の地名」郷土歴史大事典 平凡社 2003 年

7 殖民地地区画図による問題点 土地貸付手続きが遅い。

明治 24 年渡辺千秋長官 土地処分を厳しく批判

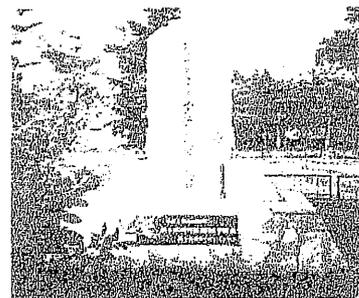
明治 25 年 5 月 10 日第 3 回日本帝国議会で河野広中等が質問

明治 26 年 3 月 24 日 北海道土地私下規則を改正

3 月 26 日 華族組合農場解散 借用地返還

雨竜屯田。本願寺。

明治 30 年 3 月 30 日 北海道国有未開地処分法を公布



殖民地画事業記念碑

Ⅲ 幌向原野 空知郡の最南端

夕張川に隣接しているが 区画図は東西南北異なる。

大きな川を渡ると市町村名が変わる。住民の気質も変わることが多い。

幌向太で東西を分ける。国道 12 号で南北を分ける。

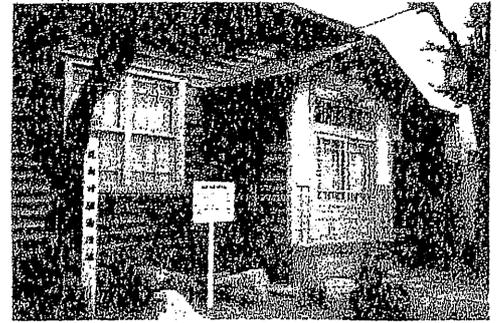
明治 16 年 幌向村設置

明治 28 年 幌向村戸長役場設置

昭和 29 年 江別との合併破談

昭和 37 年 町制施行南幌

昭和 43 年 南幌と改称



明治 26 年 石川邦光が率いる石川団体 77 入植

明治 27 年 板垣 夫が率いる三重団体 60 入植

この中に野呂市太郎測量士がいた。

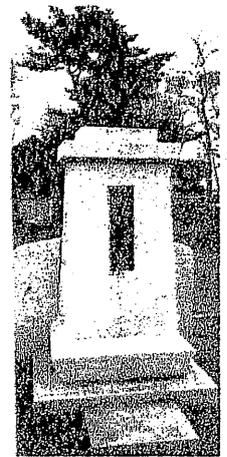
明治 27 年 幌向運河着工

昭和 8 年 保原元二 第 6 代石狩川治水事務所長夕張川の切り替えを
陳情 田辺朔郎東大教授門下

大正 11 年着工 昭和 11 年竣工 11 km

「風は見ていたー南幌その時ー」 野寄昭三 平成 14

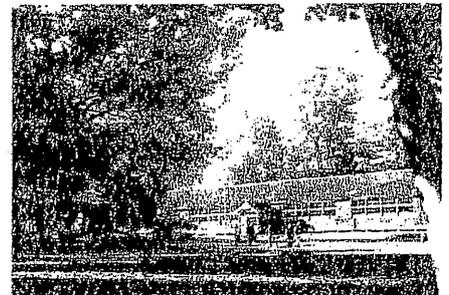
「南幌を開いた石川邦光公」 野寄昭三 平成 18 年



Ⅳ 新十津川の殖民区画図

「新十津川村区画図」 明治 23 年

「トック殖民増画図」 明治 37 年



講演会資料で語る北海道の歴史 講演録
「殖民地区画図と開拓 ～長沼町、新十津川町を例として～」
(北の資料 第125号)

発行日 平成24年3月31日

編集 北海道立図書館北方資料室

発行 北海道立図書館

〒069-0834 江別市文京台東町41番地

電話 (011) 386-8521

FAX (011) 386-6906

<http://www.library.pref.hokkaido.jp/>
